

# 「比較文学」の2冊の教科書について

小澤 萬記

(人文学部国際社会コミュニケーション学科)

## On Two Textbooks of “Comparative Literature”

Kazunori OZAWA

(Department of International Studies, Faculty of Humanities and Economics)

### 1 問題の所在

1996年に発行された比較文学に関わる二つの学会の発行する雑誌(日本比較文学会『比較文学』第39号、東大比較文学会『比較文学研究』70号)において、2冊の本が書評の対象として取り上げられている。松村昌家編『比較文学を学ぶ人のために』(世界思想社、1995)と佐々木英昭編『異文化への視線—新しい比較文学のために』(名古屋大学出版会、1996)である。<sup>1)</sup> このことは、比較文学に限らずこれまでの学会誌の書評の有り方からすれば、異例のことであると言ってよい。なぜなら、この2冊の本は、研究書ではなく、教科書として執筆されたものであるからだ。『比較文学』における書評においては、評者である今橋映子氏が、「比較文学・比較文化の教育という見地から」の書評をという要請が編集部からあったことに言及している。『比較文学研究』におけるこの2著の取り上げ方はこれほどはっきりしたものではないにせよ、同誌の書評でその後さらに、比較文学比較文化の教科書であることを標榜した2冊の書物(新田義之『文化の諸相—比較文学を学ぶために』大学教育出版、1997、同『比較文学への誘い—東西文学十六章』大学教育出版、1998、)が取り上げられている<sup>2)</sup> ことからわかるように「教科書」を書評の対象とすることが編集の一つの方針であったことはあきらかだろう。

このことは、ひとつには、今橋氏もいうように比較文学という学問領域にまつわる特殊事情の結果であろう。つまり、従来は大学院レベルでの教育体系の中で、比較文学の「教育」という問題に対して、経験主義的な理解でもある程度は対応できた。しかし、昨今のカリキュラム改革の中で比較文学・比較文化という科目が学部レベルの教育の中に取り入れられてきたことによって、それに対する自覚的な対応が研究者(同時に多くの場合教育者でもある)に求められているということの一つの結果と考えられるだろう。また、他方ではそれは比較文学という狭い「業界」の中の問題だけではない。一般に研究成果をどのように教育の中に還元していくのかという課題を研究者集団が自覚的に検討することが学会レベルでも行われなければならないという社会的要請の一つの結果とも言える。

いずれにせよ、教科書としてのこれらの著作を検討するということは、大学のカリキュラムのなかでの比較文学という科目の位置付けとあり方を検討するということと同義である。筆者は1996年と1997年にこれらの「教科書」を授業で使用した。授業科目は両年度とも「比較文学演習」であり、使用したのは1996年が『比較文学を学ぶ人のために』、1997が『異文化への視線』であった。本稿では、このことを踏まえながら、書評で指摘された問題が実際の授業とどう関わっているのかを検討することで、「学知」の世界の問題と「教育」の世界の問題がどのように結びついているのかを明らかにしたい。

## 2 「演習」としての授業科目の位置付け

これらの教科書が使用された授業科目については、98年の学部改組によって科目名、内容が一新されている。したがって、カリキュラムの中での位置付けも、96年、97と現在とは異なっているが、授業の性格などには新授業科目とも共通する点が多い。その点を踏まえながら以下に「比較文学演習」の内容、授業方法、位置付けを確認しておきたい。

比較文学演習は、旧人文学部人文学科の専門科目として開講された。旧人文学科の授業科目はいくつかの例外は有るものの、講義型の科目と少人数の授業科目とのペアからなるのを基本的な組み合わせとしてしていた。その場合、同一の授業科目名に「演習」という名前を冠しているのが少人数の授業科目である。「比較文学演習」の場合も同様である。ただし、「比較文学」(講義)と「比較文学演習」の関係は、さほど緊密ではなく、講義で行ったことがそのまま演習の中で取り上げられ深められるという形は必ずしも取られてはいなかった。特に、「比較文学」は一回生でも選択しうる数少ない授業科目のひとつであったため、一回生の受講者が極めて多く、逆に「比較文学演習」の方は2、3、4回生と受講者が多くなる傾向があった。そのため前者では入門的、概説的内容を、後者では、応用的、各論的内容を取り扱った。シラバスにおいて公表した比較文学演習の目的、方法は以下の通りである。

### ◎96年度

#### ○授業目標

今年は比較文学の入門書を使って、例年の通り口頭発表の練習をします。同時に、個別的なテーマについて書かれた論文を検討することによって、論文におけるテーマ設定や、議論の展開の仕方についても、勉強したいと思います。

#### ○授業方法

参加学生による口頭発表が中心。

#### ○備考

授業の目標は、口頭及び文章による報告ができるようにすることです。

### ◎97年度前期\*

#### ○授業目標

比較文学・比較文化の入門書を使って、口頭発表の練習をします。論文の要約および口頭による表現の練習と同時に、現在比較文学・比較文化という領域において問題になっているテーマやそれが論文とどのように表現されているのかも併せて学びたいと思います。

#### ○授業計画

授業は学生による報告を中心に行います。

#### ○備考

授業の目標は口頭による発表ができるようになることです。

\*こちらが「前期」のみである理由は後述する

演習科目の基本的な運営方法は、改めて確認するまでもないが、参加者の口頭発表が中心である。このような形態の授業の場合、「教科書」は、学生の発表のための第一次的な素材となる。この二つの「教科書」は、恐らく執筆の当初からこのようなタイプの授業に際して使用されることを念頭に置いていたように思われる。すなわち、『比較文学を学ぶ人のために』は15の、『異文化を見る目』は13のほぼ独立した論文から成り立っている。一学期間の実質的な授業回数は11~13回であるから、ひとつの論文についての学生の報告を一回の授業の核として構成することで、一冊の教科書を中心

に一学期の授業を組み立てることができる。実際には参加者数や参加者の関心の重点がどこにあるのか、あるいは授業の中での議論の展開などによって当初の計算通りに行かない場合が多々あることはいうまでもないが、授業の開始時の皮算用としてはそのようになる。

一般的に演習形式の授業の展開方法は参加者の質や目的意識などに依って、取りうるいくつかの形態がある。それを分類すると以下のようになる。

### 1 輪読型

一冊ないし数冊のテキストを使用して、担当者がその内容について報告する。

取り上げるテキストによって3つに分類できる。

- ① 原典講読タイプ
- ② 概説の勉強会タイプ
- ③ 論文集報告タイプ

### 2 調査、報告型

教官が一定のテーマを設定して、それをもとに学生は文献の調査、まとめ、結論までの活動を主体的に行う。

### 3 研究発表型

卒論演習などと呼ばれる演習のタイプである。テーマの設定も学生が行う。

1→2→3と学生に対する要求水準は高くなるといえるだろう。1はそれ自体として完結したものと設定されているわけではない。2、3へと何らかの形で発展するか、あるいはその型の演習と有機的に結びつくことが前提とされている。3を卒論などの準備のための演習(ゼミナール)とすれば、1は入門のためのものであり、2は両者の中間形態、1から2へと発展するためのひとつのステップと位置付けることができる。この中で教科書が重要な役割を演じるのは1の輪読型である。

1の三つのタイプはそれぞれ異なったタイプの教科書と結びつくが、それぞれ2、3の形態のゼミとの関連で異なった意味を持っている。①は論文執筆のための基礎的技能である文献解釈能力、あるいは外国語の文献の場合は外国語読解能力の養成を目指すものである。場合によっては論文等で利用する基礎的文献の講読を行う場合もある。3との関係で言えばそれに発展するものというよりは、補助的なものと位置付けることができるであろう。②は他の演習よりもむしろ講義の補助的役割を果たすもの(入門講義の補習)であり、そのまま2ないし3へと発展しうるものではない。したがって、1→2→3という発展の中に位置付けられるのは上記1の③「論文集報告タイプの輪読型演習」のみということになる。

筆者の担当した比較文学演習という授業科目が目指したのも、この1の③タイプの授業である。このタイプの演習を通じてどのような教育目標の達成が期待できるのかを整理すると、以下のようになる。第1が、口頭発表のトレーニングであり、第2は文献の読解・分析能力の養成であり、第3は論文の構成や論証方法の検討を通じての論文構成能力の涵養であり、第4が当該分野で可能なテーマの構成についての知識を得ることによる自己の問題意識の深化である。このような第1のタイプの演習(輪読型演習)を入り口として、第3のタイプの演習(研究発表型)を目的地とするならば、出口(卒論)において必要な能力を、どのような段階を踏んで養成して行くのかということが問題になる。論文執筆のために必要な能力(とはすなわち言い換えれば、論文執筆という形で集約される学部教育の到達目標であるが)は以下のようなものである。

- 1) テーマの発見・整理能力
- 2) 文献調査能力
- 3) 文献読解能力

## 4) 議論の構成能力

## 5) 文章構成能力

これに加えて、当該分野に関する基本的な知識および方法を身につけていることが必要であり、分野によっては実験、調査、フィールドワークの技法も必要とされる。これらのうち、1型(輪読型)の演習によって養成が期待される能力は、3)の文献読解能力、4)の議論の構成能力に該当する。さらに、当該分野の基礎的知識や、方法論も身につけることが期待する。1)のテーマの発見・整理能力と5)文章構成能力については、これらの演習で本格的に行うのは難しく、それらを身につけるための前提となる基本的なトレーニングにとどまるだろう(例えば他者の論文を検討することで間接的に構成方法を学ぶなど)。したがって、(多くの場合学年に応じた)学生の到達度に対応して演習の形態が1(輪読型)→2(報告型)→3(研究発表型)と発展して行くとすれば2型の演習で養成されるべき能力とは、文献の調査能力を軸として、テーマの発見整理能力、文章構成能力の発展ということになるだろう。

## 3 授業における2種類の教科書の利用

2で述べたように、一般的に1型および2型の演習科目の授業目標が、教科書によった文献読解能力と議論の構成能力の養成という部分(I)と、その上に立って、テーマの発展と、文献調査能力の育成を目指す部分(II)の二つに分かれるとすれば、よい教科書とはIにおいて有効な働きをするものであるとともに、IIの部分に効果的な橋渡しができるものということになる。その観点から、2つの教科書を検討してみる。

1996年度に教科書として使った『比較文学を学ぶ人のために』は以下の15章からなっている。1 諸外国における比較文学研究の動向 2 西洋小説の受容と翻訳文の成立 3 坪内逍遙とイギリスの小説家たち 4 二葉亭四迷とロシア文学 5 「自然主義」再考 6 島崎藤村と外国文学 7 夏目漱石とイギリス文学 8 森鷗外のドイツ体験 9 永井荷風とフランス 10 耽美主義の作家たち 11 モダニズム受容 12 大江健三郎のディケンズ 13 俳句の国際性 14 現代の作家とアメリカ 15 比較文学を学ぶための文献案内

一瞥してわかるように、日本の近代文学の代表的(とされる)作家と外国文学(文化)との関係を主要な柱として全体が構成されている。テーマの幅が極めて狭いため(それは「比較文学」というひとつの学問領域の入門書である以上当然のことであるが)、単なる輪読から一歩進んで、学生にある程度主体的な学習をさせようとした場合、問題が生じてくる。

すなわち、そのような場合、学生にここで取り上げられているのと類似のテーマで、ある程度オリジナリティーのある調査・発表をさせるか、あるいは同一のテーマについて書かれたより詳細な研究書について報告させるかのいずれかしかない。前者は学部学生に一般的に要求できることではなく、後者は研究技法の発展(文献の調査技法)にならないという問題がある。それゆえ、筆者の授業においては受講者の半分に一般的な調査(参考図書によるもの程度であるが)を担当させ、残りの半分に論文についての報告を行わせ、一学期・二学期で交代(テーマは変わるが)するという方法を取らざるを得なかった。この場合の文献調査は、論文についての報告と平行して行われたので、あまり突っ込んだ調査は期待できないものであった。このように『比較文学を学ぶ人のために』を教科書として使用した場合、段階を踏んでの研究技法の展開の第一段階の教科書として有効に利用することは困難であった。ただし、これは一般的に言えることではなく、どのような教育課程の中でこの教科書が利用されるかということと関連している。その点については、本稿4の「テーマ設定および方法について」で触れる。

一方、『異文化への視線』は次のような構成を取っている。

異文化とどう付き合っていくか(前書き的部分)。比較文学はレイブか(もう一つの前書き的部分)

1 むかし、ムスメ小説があった 2 外国人劇場と『ミカド』 3 父と日本についての発見 4 徳富蘆花はトルストイに何を見たか 5 霊の生まれる場所 6 試みとしての脱オリエンタリズム 7 「自己本位」で見る西洋文明 8 アジア・アフリカ人は人間と見られていたか 9 若き日の詩人の万博体験 10 <良き野蛮人>論の強みと弱み 11 まなざしの帝国主義 12 帝国との対話は続く 13 『悪魔の詩』あるいは文学という犯罪。 曲がったフランスパンを食べよう(後書き的部分)

こちらは、見てすぐにわかるように、「比較文学」というよりも明確に「比較文化」を目指した構成になっている。97年にこのテキストを使用した際には、当初このテキストを使用する計画だったのは一学期のみで、2学期には別のテーマ(日本文化論)で教科書は利用せずに授業を行う予定であった(シラバスもそのように書かれている)。その理由の一つにはこの年から専門科目の授業が完全にセメスター制に移行し、学期完結で授業が組み立てられるようになったためであり、もう一つは(こちらの方が大きな理由だが)前年度の経験から、教科書を使用した場合に文献調査や、独自のテーマ設定に発展させていくのが困難なのではないかと判断したためである。しかし、当初計画とは違って、受講生が全員一年間通してこの(名目上は二つの)授業に参加したこともあって、年間でこの教科書を使うことになった。使い方としては、その前年度の授業の開始時に考えていたやり方、つまり一学期に教科書の論文についての報告、2学期にそのテーマの延長上での調査・報告というやり方で行うことができた。これが可能であったのは、まず第一に受講生数が10名程度であったこと。<sup>3)</sup> 第二には『比較文学を学ぶ人のために』と比べて、テーマの幅が広くかつ学生の個々の問題意識に訴えうるものであったこと。<sup>4)</sup> 第三にこのテキストの欄外の注が、文献的なもののみではなく、テーマの発展や、学生のある程度自主的な調査などを想定した作り方になっていること、(つまりそのような形で教科書として使われることを念頭においていること)による。<sup>5)</sup>

ここまで、筆者は意識的に、これらの教科書の機能を、研究のための基礎的トレーニングのための素材の提供ということに絞って議論してきた。しかし、この二つの教科書が、(あくまでも筆者が担当した授業の中での話であるが)一方は、一方は発展的な技法の修得に際して有効であり、他方は必ずしも有効ではなかった理由の一つとして、そこで設定されているテーマ、言いかえれば内容の問題が大きな要素を占めることは否定できない。以下、その問題について検討する。

#### 4 テーマ設定および方法について

本稿で取り上げている二つの教科書の編集方針は対照的である。『比較文学を学ぶ人のために』が論述の対象としているのは、狭義の文学であり、方法として採用しているのは、影響関係の実証を中心とした、俗に言うフランス派の比較文学の方法である。他方、『異文化への視線』の基本的な枠組みは、「比較文化」であり、その場合の問題意識はサイドによって提示された「オリエンタリズム」の問題構成を核として、フェミニズム、ポスト・コロニアリズムなどの、最近の文化研究の成果を取り入れたものである。その意味で前者は、比較文学の専門課程の学生を対象とした、入門演習のテキストとして、あるいは伝統的な一国文学研究の専門課程(国文科、英文科など)の学生を対象とした補助的な授業のテキストとして多分有効に機能するはずである。そして、後者が対象として想定しているのは、より幅広い専攻分野に所属し、多様な問題意識を持った学生であろう。今回二つの教科書を取り上げた際の学生の手応えには、かなりの違いがあり、そのことはこのような念頭に置かれている対象学生の違いに起因するものと思われる。

すなわち、筆者が授業の対象としたのは、多様な問題関心を持った集団であり、特に文学研究に特化した学生たちではない。狭義の文学に対する関心や知識は、例えば10年前の人文系の学生と比

較しても大きく後退している。このような状況下で、狭義の「文学」の特権性に依りかかろうとしても、それが授業の中で求められている、学生たちの「いま」「ここ」の問題関心にこたえうるものではありえないことは言うまでもない。『異文化への視線』のテーマ設定がある程度そのような要請にこたえうるものであったことはすでにのべた通りである。

『異文化への視線』について、菅原克也氏は、同書の「明確な方法意識」を一方で評価しながらも、ここで提供された「解釈格子」や、テクニカルタームが結局のところ西洋起源のものであり、同書の前書きで編者佐々木氏が批判する「西洋文明とその偉大な学問的成果を性急に摂取しようとするあまり、西洋人学者の方法をそっくりまねてしまうことで自分でも気づかないうちに、自分のしている研究が自らを『侮蔑』あるいは『侵犯』する」<sup>6)</sup> ことになるという事態に同書自身が陥っているのではないかという危惧を表明している。また、小谷野敦氏は同書における、文学の政治性の指摘がフーコーやサイードの影響ならば、「漱石の時代から、相も変わらず日本の学者は西洋からの『新理論』の摂取に明け暮れているということになってしまっていて、いっかな『西洋中心主義』から抜け出ているとは言えない」<sup>7)</sup> と指摘して、菅原氏と同様な危惧を表明している。ここで指摘された問題は以下の2点に集約できる。

- 1 (特に西洋起源の「最新流行の」)理論をどう取り扱うか
- 2 1との関連で研究者の主体性をどこに求めるのか

これらの問題についての、小谷野、菅原両氏の指摘は同書の編者や執筆者にとっては、かなり痛いところをついており。ここで議論されていることは、研究者レベルではそう簡単には決着のつかない問題である。しかし、教育という観点からなら、以下のような評価を下すこともできる。

一読して理解するのは、同書が比較文学の「教育」を、従来のような「研究」自体の手引きとして考えているのではないということである。研究者としてではなく、否応なく社会へと巣立っていく学生たちに「他者」としての「異文化とどうつきあっていくか」という問いを発信し、少なくとも最新の知的議論の場に立てるだけの「知性」を呼び覚まそうとしているのである。<sup>8)</sup>

このような「試み」を、単に『異文化理解』とか『異文化コミュニケーション』とか、文部省や世間に受けのいいジャンルとして『比較文学』を变形させてしまおうという企み(小谷野)と断ずるのは一面的にすぎるだろう。いわば、これは『「国際人になろう」』という学生のいたいけな決意にそれがいかに「能天気なもの」であっても真摯に答えようとする試みなのである。対象を「文学」に限定せず、狭義の「文学作品」を取り上げたときにもむしろ作品の外に出て行こうとするのも狭義の「文学」がこれまで隠蔽してきたその「政治性」を明らかにするためというばかりではなく、すでに触れたように現代の学生の興味関心のあり方への対応でもある。

一般的に言えば、今日の大学教育が学生に対して身につけることを期待する知性の中身は、特定の問に対する定型的な「正しい答え」の出し方ではなく、柔軟で、多面的な思考能力であると言えるだろう。とすれば、そのような能力の養成のためには、複数の答えの間で宙吊りになる経験、非決定に耐える経験をする機会が与えられることも重要である。そのためのひとつの出発点として「合わせ鏡の無限の入れ子のなかに自己の鏡像を眺める」という「無限の往復運動」も無意味ではない。その場合、援用されている、理論、用語は(それ自体、西洋起源の最新流行のものであるが)、いわば当座のものとして利用すればよいだけである。小谷野氏は(直接的には、『比較文学を学ぶ人のために』含まれるヨコタ村上孝之氏の文章を批判して)「近代を否定するとすれば、心理学も社会学も精神分析も文化人類学も一般言語学も否定されることになるではないか」という趣旨の批判を行っている。この批判については、次のように考えることができるだろう。すなわち、ここで学

生にたいして求められているのは、そのような諸学問の成果を批判の俎上に載せることなのであると。したがって、小谷野氏に反論する、村上氏の「比較文学という学問を守るべきとは考えない」という発言も、元来は同氏の学問上の立場から発しているものではあるが、学生教育の一手段として、いわば比較文学・比較文化という方法を利用するのだという観点からすれば、極めて当然のことである。

ここでは具体的に触れなかったが、『異文化への視線』に含まれる個々の論文についても、それぞれの筆者の主観的な意図はともあれ、少なくとも授業の組み立てとしては上に述べたような形で学生教育に活用することが可能であり、同書はそのような要請に果敢にこたえようとしたものとして評価しうるだろう。

最後に比較文化あるいは比較文学の教育という問題を考えた時、ここで浮上してくるもう一つの問題を指摘して本稿を終わりたい。すなわち、研究者養成あるいは、大学専門課程での教育を、この教科書の延長上に構想するとすれば、それはどのようなものであろうかということである。すでに指摘したように、『比較文学を学ぶ人のために』は、ある程度専門課程での比較文学教育を想定した教科書である。『異文化への視線』との製作意図、対象学生の相違を考えれば、内容、テーマ設定、方法が異なっているのは当然である。しかし、菅原氏や小谷野氏が『異文化への視線』に感じている違和感の背景には、いわば、『比較文学を学ぶ人のために』を支えている「比較文学」のイメージ（それは、両氏も含め、大部分の比較文学・比較文化の研究者が受けた「比較文学」教育のイメージとほぼ一致するはずだが）と現在様々な専攻の学生を対象に求められている「比較文学・比較文化」のずれが存在するのではないだろうか。とすれば、この地点で問題となるのは『異文化への視線』の構想を核とするような専門研究領域（それをどのような名称で呼ぼうと）はどのようなものであり、その研究者（同時にこのような教科書を使う教育者でもある）はどのように養成しうるのかということである。また、（ここでの議論にひきつけて言えば）そのような研究者養成のための教科書はどのようなものでありうるのかということである。そして、その間に答える事が同時に「入門書中の文書でありながら、ではこれから何をしたらいいのか、ほとんどプログラムを示せていない」（小谷野）というそれ自体としては正当な批判に対する回答となりうるだろう。

## 注

- 1) 『比較文学』での評者は今橋映子氏。ここでは『比較文学を学ぶ人のために』、『異文化への視線』の両書が取り上げられている。『比較文学研究』では菅原克也氏が『異文化への視線』を取り上げており、小谷野敦氏が「『西洋・近代』はこえられるのか？」と題して両書を取り上げている。また『比較文学研究』71号では、『比較文学を学ぶ人のために』の執筆者の一人であるヨコタ村上孝之氏が小谷野氏の批判に反論している。
- 2) 『比較文学研究』73号（1999年）
- 3) 96年度の受講生は20数名であった。
- 4) 具体的には、例えば「アジア・アフリカ人は人間と見られていたか」における、「逆オリエンタリズム」の指摘に対しては、反発も含めてかなり活発な反応が学生の間に見られた。反発した学生たちの主張は「論文の著者は何かしら日本の逆オリエンタリズムを批判しうる特権的な立場に自らを置いているのではないか」というものであった。このような意見が出てくるのは、逆説的だが、論文の著者（大貫徹）の挑発が見事に成功した結果ということができるだろう。
- 5) このような注のつけ方について、今橋、菅原両氏は読みにくいと指摘しているが、授業での使用を考慮すると、かなり合理的といえる。
- 6) 『比較文学研究』70号、141ページ
- 7) 同上、149ページ
- 8) 『比較文学』39、147ページ

